

山形と私のボサノバ

宮坂 不二生



める電気機械と建設のウエートが全国トップクラスで、産業の空洞化が進展すると共に、雇用の空洞化リスクが高まっている。これを解決するにはどうしたらいいのか？いろいろ考えて

「山形県の日曜日はボサノバで始まる……」これは某新聞社系の週刊誌記事の書き出しだ。実は私はブラジルで誕生したボサノバ音楽の大ファンで、昨年十月から半年間、毎週日曜日の午前十一時からボサノバ専門チャンネル「ボッサ・ボッサ・ボッサ」というYBCのラジオ番組のパーソナリティーを務めた。巷ではお固い日銀マンとしては異色の存在と書われているらしい。

私は中学生の頃からクラシックからジャズまでいろいろなジャンルの音楽を聞いてきたが、中でもボサノバは今でも格別の存在だ。ブラジルで誕生した経緯もあって、音楽的には「海空、太陽、恋……」といった夏のイメージで捉えられがちだが、先入観なく聞いて頂ければ分かるかと思うが、意外にも冬でも夜でもピタリとはまる。ボサノバは本家ブラジルでは今や風前の灯火らしいが、ここ日本では、癒しブームもあって逆に世界で一番存在感を増している。ホテルのラウンジやテレビCMなどのBGMとして雰囲気づくりによく利用されており、「イパネマの娘」、「ウェイブ」、「サマーサンバ」など有名曲を流せば、なんだそれ聞いたことがあるとの反応が返っ

てくること請け合いだ。

ボサノバは、もともと日常の語り口を適度なスウィング感で表現したもので、まさに自然体の寛ぎの音楽である。極端に狭い音域の中に複雑なハーモニーが持ち込まれ、シルクのように滑らかなメロディーが施された魅力的な音楽だ。アレンジによってはオリジナルの曲がさらに輝きを増すなど、聞き比べをしなくてはならない不思議だ。いつしか聞き込んだボサノバのレコードは数千枚に達した。

私は今となっては大変貴重となったボサノバのレコードを二十世紀の遺産として次代に伝えたいとの思いから、十年くらいの準備期間を経て一年半ほど前に世界初の『ボサノヴァ・レコード事典』を監修・発刊した。そんな時に、本書がYBCの女性ディレクターの目にとまり、冒頭の番組に出演することとなった。番組ではOLなど女性がリスナーの中心と考え、ボサノバ特有のリラックス感あふれる曲を中心にセレクトし、女性アナウンサーとの掛け合いの形で魅力を紹介した。

ところで、私は日本銀行の立場で山形県の景気動向を分析するうちに、山形県が抱える産業構造上の問題点に行き着いた。県内に占

いくうちに「最上川」をシンボルとする地域づくりの県民運動を展開することで克服できるのではないかと思うに至った。その後、地域づくりを目指した官民一体の、美しい山形・最上川フォーラム」の創設に参加し一年間議論した結果、「美しい山形・最上川一〇〇年プラン」が昨年七月にまとまった。その中で、私は「最上川夢の桜街道プラン」を提唱し、現在五つのモデル市町で検討が進んでいる。日本の原風景が点在する最上川沿いに遊歩道を整備し、地域の方が桜を植樹することにより、ドイツのロマンチック街道に匹敵する観光資源になればと考えている。古来、日本の「桜」には日本人としてのアイデンティティを感じさせる無限の力がある。そのような最上川がやがてアジアの人々との交流の場になればと願っているところだ。

そしていつか、その最上川の桜並木の下で「ボサノバ・コンサート」を開いてみたい。それがボサノバ人である私のささやかな夢である。最上川にはボサノバがよく似合う。

(日本銀行山形事務所所長・山形市)